

“アシと蹄を考える会” 第9弾! パートⅡ —平成26年度第2回リム&フットケア・ワークショップ—

平成27年2月5日、日本軽種馬協会静内種馬場研修所にて開催された標記ワークショップ。今回は、その後半部分の概要を紹介します。

症例報告

3. 「肢蹄異常の矯正法」

(JBBA軽種馬生産技術総合研修センター：T氏)

症例1はX脚で、左前Grade1(G1)右前Grade2(G2)。18日齢から16日間、両前の内側にスーパーファースト(SF)を充填して負面を高くし、張出し部を設置したところ、跛行したためSFを除去。15ヵ月齢にて蹄に狭窄が認められたが、X脚矯正を優先して張り出しプレート(EP)の装着と除去を繰り返した(20日間×3回)。45ヵ月齢で狭窄は改善したが、右前のX脚はG1のまま残存した。症例2のX脚は、両前ともにG3で、11日齢の時にEPを接着したが、良化が見込めないことから、19日齢でシングルスクリュウ(SS)手術を行い、5週齢で蹄の狭窄が目立ったためにEP除去、15ヵ月齢では両前ともにG1となったので、SSを抜去し、その後SFを3週間接着して改善した。症例3のX脚は左前G2、右前G3で、25日齢でSS手術を行い、左前は20日間、右前は28日間でSSを抜去し、2ヵ月齢で改善した。症例4は左前のX脚に加え、その肢が負重時には外側に反る(しなる)状態を呈していた。25日齢でSS手術を行い、32日間でSSを抜去。2ヵ月齢でX脚は改善したが、3ヵ月齢の時に左前球節内反を認め、外側EPを接着し、5.5ヵ月齢で改善した。症例5は左前の内反で、2ヵ月以上に亘り外側EPを接着して矯正したが改善しなかった。過去の本ワークショップにおいて、球節のSS手術は1~1.5ヵ月齢までが適期であり、それ以上経つと治りにくいとの報告があったが、この症例は3ヵ月齢での手術であった。4.5ヵ月齢時には真直ぐになるまでに良化したため、SSを抜去したが、改善までには至らず、その後6.5ヵ月齢まで外側EPを接着

してようやく改善した。症例6は当歳時に左前球節内反を患ったもので、3週齢から4.5ヵ月齢まで外側EPを接着して改善したが、1歳の1月から左膝骨端症を発症して疼痛のために左前がO脚となり、外側EPを接着した。患部の治療や運動制限(1月~パドック放牧⇒3月~パドック放牧+ウォーキングマシン運動⇒4月~半日放牧+ウォーキングマシン運動)を実施したが骨端症は改善せず、1歳の5月にSS術を実施し、O脚が改善されたため3ヵ月後の8月にSSを抜去した。その後O脚とは逆のX脚となり固まったとの説明があった。

まとめとして、若馬の肢蹄は変化しやすいことから継続的にその状態を観察し、その状況に応じた臨機応変な対処が必要であり、馬管理者と獣医師と装蹄師の連携が重要であると締めくくった。

【コメント】

X脚、球節内反、O脚の6症例中5症例が装蹄療法だけでは改善せず、SS手術を必要としたうちの4例については手術時と抜去時の動画映像を駆使して分かりやすい説明があったが、矯正に当たっては患馬の状況を確認し、装蹄や獣医技術との併用を考慮しながら、その馬にベストな対処法を考えるべきであろう。

おわりに

- 今回の参加者は、この企画がスタートして初めて40名を超えたが、開業装蹄師の出席者は14名とやや低調であった。
- また予定していた症例報告の一部が直前にキャンセルとなり、今回の症例は過去最少の3題となった。こんな事、あんな事、やってみたらこうだった等々、今後の肢蹄管理に繋がる報告で構成するざっくりばらんな集談会であることを理解させながら、事務局としても報告を希望する参加者には積極的に援助していきたいと考えている。
- 今回も活発な意見交換が出来たが、装蹄師と獣医師の症例に対する考え方には多少相違が見られる場面もあり、ワークショップ等を通じて意見交換を行ってそれらを払拭するとともに、さらにレベルアップに向けて装蹄師と獣医師等の連携を強化していきたいと考えている。



T氏の説明スライドの1枚



講演風景